

創刊の辞

学長 仲 澤 浩 祐

一昨年四月、四年制の大学として新たなスタートをきってからおよそ一年半余、ここに本学の『東洋文化研究所所報』をお届けすることができると至ったことは慶びにたえないところである。

東洋学は十八世紀にヨーロッパにおいて始まった。なぜ東洋研究がヨーロッパで起こったか。これはいうまでもなく十七世紀初め、イギリス、オランダ、フランス等々が競ってインドに進出し香料等の物産輸入を通して、やがて植民地経営にのりだしたことに大いに起因している。一般的には東洋といえ、地域的には日本、中国、インド、ミャンマー、タイ等々のアジア東部及び南部を含んだ、いわばヨーロッパ以東の諸国を総称しているが、文化史的には、黄河、揚子江、インダス河、ガンジス河、チグリス・ユーフラテス河等の大河を中心とした古代文化圏を指している。

本研究所では「仏教及び仏教文化等に関する調査研究」を進めることをめざしているが、当面「東洋文化・思想の研究」という大きなテーマのもとに研究グループを構成して調査研究を進め、その成果を世に問うていきたいと考えている。文化すなわちカルチャーとは動詞形カルティヴェイトに由来し、カルティヴェイトが「土地を耕す」「改良する」「品性をみがく」等の意味をもつことから、カルチャー

は、「精神的につくりだされたもの」を意味する。具体的には、私たち一人ひとりがもつ可能性の中から良好なものを耕す努力をし、その成果を教養として心身に修めることを意味するといえる。タイラーは文化とは、「社会成員としての人間が獲得した知識、信仰、芸術、道徳、法律、慣習、その他あらゆる能力や習慣を含む複合的全体である」(『未開社会』)というが、言葉を換えれば、文化とは衣食住を通して人間生活の過程で形成されてきた物心両面に亘る成果をいうのである。私たちは、この成果を前代から承け継ぎ、或いはこの成果を土台として生活している。又新たな文化を創造し、さらに次の世代に伝達してきている。

ところで、今年は当に波木井実長公の七百遠忌に当たる。遡れば、文永十一年(一二七四)五月十七日、実長公は、漂泊の思いを抱かれて身延の里につかれた日蓮聖人をお迎えし、生涯かけて日蓮聖人を外護されることを誓われた。以来日蓮聖人は身延山にあって子弟の教育に腐心されたのであるが、いわば本学の淵源はここにあるといえよう。今回波木井実長公に関わる研究を特集として創刊する意味もここにあることを記して、発刊の辞としたい。

(一九九六・一〇・二五)